Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 人新世のエコクリティシズム : Wu Ming-Yi, Alexis Wright, Amitav Ghosh を中心に |
| Author(s) | 小杉, 世 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 73-85 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/69893 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 人新世のエコクリティシズム

——Wu Ming-Yi、Alexis Wright、Amitav Ghosh を中心に——

小 杉　世

## １．はじめに

大気化学者の Paul Crutzen が 2000 年に「人新世 (the Anthropocene)」という新しい地質年代の概念を提示してから 18 年になる。[1] グローバル時代の人間の経済活動が、地球の環境に不可逆な影響を与えうること、人間の活動が地球という惑星の上にすむ他の種や人間自身の生存に、またひいては惑星そのものの存続に影響を与えるということを人々が認識したのは、人類の歴史のなかではまだ比較的最近のことである。人類は単なる‘biological agent’ではなく、地球の最も基本的な物理的プロセスに変化を与える‘geological agent’ (206)となったと述べる Dipesh Chakravarty は、「現在の種の消滅の割合は専門家によれば恐竜が絶滅した 6500 万年前に匹敵する」[2] (207) と指摘し、人間中心的な観点(homocentric view)から、他の種の生命体を見渡す観点 (zoecentric view of the planet) への転換の必要性を主張する。[3]

核実験や原子力発電の開発によって、これまで地上に存在しなかった放射性物質が生み出され、その他多くの化学物質や土に還元されない廃棄物が地球という惑星の環境に大きな影響を与えるようになった 20 世紀半ば以降の状況は、まさにそのような新しい地質年代の始まりともいえる。[4] 宇宙が誕生してから 137 億年といわれるが、放射性核種のなかには

---

[1] Paul J. Crutzen and Eugene F. Stoermer, ‘The “Anthropocene”’ *IGPB Global Change Newsletter* 41, May 2000: 17-18. 人新世を主題とする研究は多数あるが、『現代思想』第 45 巻 22 号 (2017 年 12 月): 41-244 でも特集（「人新世―地質年代が示す人類と地球の未来」）が組まれた。

[2] Dipesh Chakravarty, ‘Climate of History: Four Theses’, *Critical Inquiry* 35.2, Winter 2009: 197-222.

[3] Dipesh Chakravarty, ‘The Human Condition in the Anthropocene: The Tanner Lectures in Human Values’, at Yale University, 18-19 February, 2015 (https://tannerlectures.utah.edu/Chakrabarty%20manuscript.pdf).

[4] Crutzen (2000)は人新世の始まりを 18 世紀後半としている。氷河に含まれる $CO_2$ や $CH_4$ などの温暖化ガスが増加し始める産業革命のころとする説 (Libby Robin, ‘Histories for Changing Times: Entering the Anthropocene?’, *Australian Historical Studies* 44.3, 2013: 329-340, p.331)に対して、放射性降下物が初めて地層に含まれるようになった 1945 年とする説(Joseph Masco, ‘Bad Weather: On Planetary Crisis’, *Social Studies of Science* 40.1, February 2010: 7-40)、人口や化石燃料使用が急増した 1950 年ごろとする説 (Will Steffen, Jacques Grinevald, Paul Crutzen and John McNeill, ‘The Anthropocene: Conceptual and Historical Perspectives’, *Philosophical Transactions of the Royal Society* 369 no.1938, March 2011: 842-67) がある。上記の Robin pp.334-5、塩田弘ほか編著『エコクリティシズムの波を超えて―人新世の地球を生きる』（音羽書房鶴見書店、2017）、p.x 参照。

45 億年という天文学的な半減期をもつものがあることを思えば、ヒトという種が絶滅してもなお残り続けるという意味で人間が責任をもてないものを生み出してしまったことの意味は大きい。

Bruno Latour は *Kosmokolos: Global Climate Tragi-Comedy* (2011)[5] のなかで、福島第一原発の事故後の処理に奔走する作業員たちを登場させ、劇の中盤で Mary Shelly と彼女の生み出した登場人物 Viktor Frankenstein[6]、さらに博士の創造物である The Creature（怪物）が交わす会話を次のように描く。

> **Viktor:** Demon, monster vomited out of my imagination, creature from hell, let go of me, go back to the nothingness you should never have emerged from.
>
> **The Creature:** You're the doubly demonic monster who pulled me out of nothingness only to then flee shamefully. Ah, you thought you'd locked me up for ever in your alchemist's lair. But I got out, to take my revenge on you, and that's when I became worse, infinitely worse. […]
>
> **Viktor:** Even God fled in the face of His Creation, he washed every thing in the waters of the Flood. […]
>
> **The Creature:** […] I was born good. Viktor. It was only after being abandoned by you, yes, that I became loathsome. […]
>
> **Viktor:** How dare you say you were born good? The opposite-horrible. Crazy, hideous, scarred, made of pieces and bits hastily stitched together.
>
> **The Creature:** And whose fault is that? I was like anything that is born, anything that begins, anything what wails in the appalling pangs of childbirth. You ran away, Viktor, you ran away.
>
> (37、下線は筆者)

核開発技術は科学者の実験室 (alchemist's lair) におさまってはおらず、軍事に利用されると核兵器のような人間がコントロール不可能な「怪物」を生み出してしまう。自分の生み出した怪物に「生まれてくるべきではなかった、もとの無に戻れ」という博士に、怪物は「あなたが私を引っぱり出しておきながら、逃げたのだ」と責める。博士は「神でも自分の創造物のおぞましさに慄き逃げ出すだろう、すべてを洪水の水に流して」という。科学者の無責任さを非難するこのやりとりには、核兵器や核廃棄物をめぐる議論のアナロジーがよみとれる。地中深くに眠るウランは、それ自体は悪いものではないが、人間がそれを引っぱり出し、核兵器や原発に用いて、その結果生まれた都合の悪い廃棄物は（まるでトイレか何かのように）水に流して忘れ去ろうとする。しかし、一旦生まれた核廃棄物は決して都合よく無に戻ってはくれない。繰り返し「墓場」(廃棄場) から出てきては「復讐する」。

---

[5] Bruno Latour, Frédérique Ait-Touati & Chloé Latour, *Kosmokolos: Global Climate Tragi-Comedy* (draft), Translated by Julie Rose, Version Four, May 2011.

[6] Mary Shelly の原作では Victor であるが、スクリプトの表記通り Viktor としている。

川上弘美は東日本大震災後に出版された『神様 2011』のあとがきで、下記のように述べる。同じアパートに引っ越してきたくまと散歩する主人公の語りのなかでは、福島原発事故は「あのこと」として語られる。

> 何億年もかけて、ゆっくりと、地中で減りつづけていたウラン 235 を人間はあちこちからかきあつめてぎゅうーっとかためて、「さあ、どんどん分裂せよ、光をだせ、熱をだせ、衝撃波をだせ、働け働け」と、鞭打ったわけです。原爆では、ウランをいっぺんにぱあっと働かせ、原発では小出しに働かせ……。
>
> ウランの神様がもしこの世にいるとすれば、いったいそのことをどう感じているのか、やおよろずの神様を、矩(のり)を越えて人間が利用した時に、昔話ではいったいどういうことが起こるのか。(43-44)[7]

上記の二つの引用は響き合うところがあるだろう。

20 世紀後半以降には、放射能や化学物質に汚染された地球を描くさまざまなディストピア小説や映画が生まれた。[8] そして、なかば終末的な世界のなかで、異なった生のあり方を模索するような作品がみられる。本稿では、台湾の現代作家 Wu Ming-Yi の小説 *The Man with the Compound Eyes* (2011) [9]、オーストラリアの中国系アボリジナル作家 Alexis Wright の小説 *Carpentaria* (2006)[10] と *The Swan Book* (2013)[11]、ベンガル系インド人作家 Amitav Ghosh の小説 *The Hungry Tide* (2004)[12] と二つのエッセイ(*Countdown*, 1999; *The Great Derangement*, 2016)[13]、および、ポストヒューマンの世界を描く太平洋を舞台とした小説・映画をとりあげ、人新世における'postcolonial ecocriticism'[14]という観点から分析する。篠原雅武は『人新世の哲学』で、Hannah Arendt の政治哲学に基づいて人新世における「人間の条件」を考察し、人間が「根なし草というだけでなく、世界において無用になり、あたかも廃棄物のようなものとして存在させられているような」状況（119）について言及する。[15] 本稿ではこ

---

[7] 川上弘美『神様 2011』（講談社、2011）.

[8] Nevil Shute の小説 *On the Beach* (1957)、黒澤明の映画『生きものの記録』(1955)など。Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* (1985)では、子供を生めない Unwomen が除染作業(cleaning up)のため送られる Colonies は 3 年もいれば鼻がもげ、皮膚がゴム手袋のようにはがれるほど汚染がひどく、ギレアデ共和国の汚染の原因の一つは度重なる原発事故核や生物化学兵器の貯蔵庫からの有害物質漏れとされている。(Margaret Atwood, *The Handmaid's Tale*, Fawcett Crest, 1986, p.386.)

[9] 本稿での引用頁数は英語版 (Wu, Ming-Yi, *The Man with the Compound Eyes*. Translated by Darryl Sterk, Vintage Books, 2014) による。原作は吳明益『複眼人』（夏日出版、2011）である。

[10] Alexis Wright, *Carpentaria*, Giramondo, 2006.

[11] Alexis Wright, *The Swan Book*. Giramondo, 2013.

[12] Amitav Ghosh, *The Hungry Tide*, The Borough Press, 2005.

[13] Amitav Ghosh, *Countdown*. Penguin Books, 2010. Amitav Ghosh, *The Great Derangement: Climate Change and the Unthinkable*. U of Chicago P, 2016.

[14] Graham Huggan & Helen Tiffin, *Postcolonial Ecocriticism: Literature, Animals, Environment*, Second Edition, Routledge, 2015 参照。

[15] 篠原雅武『人新世の哲学—思弁的実在論以後の「人間の条件」』（人文書院、2018）. Hannah Arendt は *The Origins of Totalitarianism* (1951) において、全体主義はシステムにとって無用の人間を「余

の「無用化」「廃棄物化」を鍵として、これらの作品を概観したい。

## ２．Wu Ming-Yi の太平洋横断的な想像力――ゴミの浮島、津波、核廃棄物

20 世紀のイギリスのモダニスト作家 Virginia Woolf は、第一次世界大戦中、統合失調症の療養の回復期に、また、第二次世界大戦中の疎開先であったイングランド南部のサセックス州の田舎の村において、ヨーロッパの文明の崩壊の危機をイギリス人が意識していたそのさなか、丘陵地帯を毎日長距離にわたって散策しながら、蛾や蝶や小動物など自然のなかの小さなものたちの生をつぶさに観察していたことが、日記やエッセイ、小説の細部からよみとれる。人間のいない「白昼の静寂と光輝」のなかで「眼がない」樹や花が繁茂し空を仰ぐ気味わるさを描いた *To the Light House* (1927) の短い中間章（第一次世界大戦中の時の流れを描く第二章）[16] の動植物描写や、草の茎にとまった蝶の「繊細な装飾をほどこした帆」[17] のような翅が風に揺れるさまを描く Woolf のまなざしに近いものを、この台湾の現代作家 Wu Ming-Yi（吳明益）の蝶についてのエッセイ集に感じる。岩や木や植物の茎の先端や花にとまる蝶の細部を克明にとらえた写真は、人間のいない世界の静謐感に満ちており、身体感覚も知覚も人間とは全く異なるこの小さな生命体を、息をひそめて見つめる Wu の没入的なまなざしが感じられる。このもの言わぬ蝶たちの大きな複眼に何が映っているのかを想像してみたくなる気持ちはわからなくない。

環境活動家、アマチュア蝶学者としても知られる Wu Ming-Yi は、自ら山を歩き、撮影した蝶の写真と蝶や植物の詳細なスケッチつきのエッセイ『迷蝶誌』(2000) [18]などを出版し、最新作の小説 *The Stolen Bicycle* (『單車失竊記』2018) はブッカー国際賞を受賞した。Wu Ming-Yi はエッセイ『蝶道』(2003)のなかで、「流星蛺蝶（スミナガシ）の世界観」[19]という表現を用い、蝶の目で眺めた世界は人間の目でみる世界と異なるだろうと想像している。[20] *The Man with the Compound Eyes*（『複眼人』2011）は、そのような昆虫の目で世界を見る想像力を想起させるタイトルである。しかし、崖から転落して死に行く登場人物が見る幻のなかに現れる「複眼の男」の目に映る光景は決して読者に明かされない。

Wu Min-Yi の小説 *The Man with the Compound Eyes* は、太平洋の架空の島 Wayo Wayo に生まれた青年 Atile'i が 15 歳の満月を迎え、次男であるが故に島の習慣に従って、故郷の村か

---

計な者(superfluous men)」としてしまうことを指摘している。

[16] 日本語訳は伊吹知勢『灯台へ』（みすず書房）を参考にさせていただいた。p.178.

[17] 'The Butterflies and Moths: Insects in September', *The Times*, 14 September, 1916. ウルフが匿名で投稿したエッセイである。Sei Kosugi, 'Representing Nation and Nature: Woolf, Kelly, White', Anna Snaith & Michael Whitworth eds., *Locating Woolf: The Politics of Space and Place*, Palgrave, 2007, pp.81-96 で言及している。

[18] 吳明益『迷蝶誌』（中国文联出版社、2014）.

[19] 吳明益『蝶道』（修訂版）（二魚文化事業有限公司、2014）デジタル版、p.35.

[20] Ti-Han Chang が'The Role of the Ecological Other in Contesting Postcolonial Identity Politics: An Analysis of Wu Ming-yi's Writings on Ecology'—an oral presentation at the 11th annual conference of EATS (European Association of Taiwan Studies), at University of Portsmouth (UK), 30 April to 2 May, 2014 で『複眼人』を論じており、『蝶道』の同じ引用箇所に言及している。

ら追放され、海神に捧げられるその前日の描写から始まる。カヌーに数日分の食糧と水だけを積み海に出る次男たちは大洋で命つき、その霊はアバターであるマッコウクジラ(sperm whale)に宿る。しかし、Atile'i は生き抜くことを決意する。太平洋の真ん中の無風地帯に広がる「太平洋ゴミベルト(Great Pacific Garbage Patch)」と呼ばれる巨大なゴミの集積の存在は、1988 年に発見され、プラスティックのゴミをクラゲなどの餌と間違えて飲み込んだり、投棄された網にからめとられて死ぬウミガメや、餌と間違えて呑み込んだプラスティックのゴミをお腹いっぱいにためて死ぬ海鳥の写真はよく報道されているが、Atile'i は太平洋上で発生した巨大なサイクロンによって分断されたこのゴミベルトの浮島のひとつに漂着し、さらに津波によって、ゴミの浮島ごと台湾の東海岸に打ち上げられる。Wayo Wayo の社会慣習により「無用化」され海に流された次男の Atile'i がゴミの島によって運ばれ、漂着した台湾で、これまた自分自身を「無用化」して自殺しようとしていた台湾人の女性教授 Alice Shih と出会う。津波で行き場を失った猫を拾い Ohayo と名づけた Alice は、Atile'i を友人の山小屋にかくまい、死ぬのをやめて生き始める。「鳥のさえずり」のような言葉をしゃべる Atile'i と台湾人の Alice は、互いの言葉を学んで互いの島について語り合い、その内容は会話というより内的独白として描かれる。海岸は世界中から集まったマスコミと救援隊や科学調査に駆けつけた人々でごったがえし、日光にさらされたプラスティックゴミから出る有害物質で海水の色が変わって (289)、台湾は島よりも大きなゴミの集積に海岸線をすっぽり囲まれてしまう。ゴミの集積は、人々の人生の記憶のエピソードとも結びついており、ゴミの津波（'the Trash Vortex'）が到来することで、登場人物たちはゴミと結びついた過去の日常の記憶を思い出す。そして、これらのゴミの集積が、長い間に人間が蓄積し、生み出したものであり、それらが今自分たちのもとに突き返されたことを意識する。台湾東海岸地域の先住民アミである Hafay は苦労して貯めたお金で建てたカフェ(the Seventh Sisid)が津波に呑まれるのを見て涙一つこぼさず、いつかは海にお返しするものだ('she'd had a premonition that one day the house would have to be returned, most suitably to the sea', 149)と感じる。この小説には、牡蠣を拾う住民たちの目に映る石油化学工場による沿岸の汚染や、ゴミの島の周辺でプラスティックを呑み込んで死んだカメの死骸、プラスティックゴミの集積が漂わせる悪臭、海水面の上昇で侵食されていく海岸地域の家など、非常に現実的な描写で環境の問題が描かれる。インドがダムの建設に国の近代化の象徴をみたとすれば、この小説中では台湾の山脈を横断する長距離トンネルの 15 年をかけた開通工事が大事業として描かれる。トンネル内の地滑り事故の瞬間、人々は山の存在を感じさせる「巨大な足音」(207) のような不気味な音を聞くが、この事故で同僚をなくした技師 Jung-chin がトンネル開通後に自殺するという事件は小説の終わり近くで、兄をなくした弟 Jung-hsiang Li の視点からさりげなく語られる。元マッサージ師だった Hafay の回想に登場する一言も語らないが不幸を抱えていることがその背中からわかったという男（数か月通って突然来なくなった客）とこの自殺した男は同一人物かもしれないことが、小説の複眼的構造から読者には想像できる。国家事業の影で声なく消えていく労働者を、先住民であるだけでなく、売春婦

と同様に社会の周縁におかれた元マッサージ師の女性の視点から描いている。また、(小説中でおそらく昆虫に変容する) Alice の息子 Toto は発達障害を抱えており、言語能力に問題があるが、並外れた視覚的能力(‘amazing visual acuity’ 75)をもつ。Toto は登山の途中で姿を消した父親を追って崖をくだる途中、谷底から聞こえてくる「複眼の男」と父親が話す声を耳にして、崖を上り始めるが、とたんに体が軽くなり、爬虫類か昆虫のように崖を這い上る。そして崖の上でテナガコガネを見つめる Toto は視界に突然違和感を覚える。‘[…] he feels everything start to get ‘blurry’ […] but a kind of blurriness that people could never imagine. It is as if he is transforming into a leaf, an insect, a birdcall, a drop of water, a pinch of lichen, or even a rock’ (286,下線は筆者)。もともと言葉をしゃべらず、人間の世界の周縁にいたこの少年は、昆虫になったのか、苔（あるいは石）になったのか、山中に消えて二度と戻らない。

この小説は、‘Alice’s Island’、‘Dahu’s Island’、‘Hafay’s Island’などの章からなり、それぞれの章が、Wayo Wayo 人の Atile’i、台湾人の Alice と北欧人の夫、Alice の海辺の家の近くでカフェを営む先住民アミ(Pungcah) の女性 Hafay、同じく Alice の友人で先住民ブヌン(Bunun) の Dahu など、複数の視点で語られる。そして、山で谷から転落した Alice の夫が生死の境目をさまようとき、「複眼の男」が登場する。最後に、この小説のタイトルは、Alice が行方不明になった夫と息子の物語を想像して書いたストーリーのタイトルであることがわかる。

このテクストには、さまざまな小説や映画とのインターテクスチュアリティが見られる。Wayo Wayo には台湾にも昔あった口噛み酒があり、台湾と太平洋諸島の文化的なつながりを感じさせている。サイクロンの襲撃で海に流され、ゴミの浮島に乗って漂流する Alexis Wright の小説 *Carpentaria* の主人公 Will と夫をカヌーで探しに発つ妻の Hope との関係は、Wu Ming-Yi の小説では、ゴミの津波 (the Trash Vortex) に乗って台湾に漂着する Atile’i と、自ら作ったカヌーで Atile’i を追って船出した恋人の Rasula（小説の最後のほうで、20 年前に原油流出事件 [21]によって漁業が壊滅したメキシコ湾のイカ漁船が洋上で救出した身重の女性(293)としてニュースで報道される）との関係に対応し、Will とその父親 Normal Phantom との関係は、Atile’i とその父 the Sea Sage との関係に似る。また、海岸に座礁するクジラの群れは、マオリ作家 Witi Ihimaera の *The Whale Rider* (1986)さながらであるが、Wu の小説では、海で死んだ Wayo Wayo の次男たちの魂が宿るマッコウクジラの群れの死は、Wayo Wayo の人々の二重の死を意味する。そして、Atile’i が台湾を発ち、再び帰還を目指した故郷 Wayo Wayo は、ゴミの津波 (the Trash Vortex) に呑み込まれてしまう。

この小説に登場するゴミは、島の海岸を埋め尽くすプラスティックゴミの集積だけではない。最近、台湾はアジアで初めて脱原発を宣言した。現在台湾には北端に稼働中の原発が二箇所と南端に一箇所あるが 2025 年までにすべての運転が停止される予定である。小説の終わり近くにさりげなく言及される放射性廃棄物の廃棄場となっている「南の村」というのは、台湾の南東部にある先住民タオ (Tao) が住む蘭嶼島のことか、島の南端の第三原

[21] メキシコ湾原油流出事故は 2010 年に起こっており、この小説はその翌年に出版されている。事故から 20 年とあるので、小説の設定は 2030 年の近未来となっていることがわかる。

発を暗に指していると思われる。1980 年代には原発から出る核廃棄物の貯蔵施設が先住民タオの居住地域である蘭嶼島に建設された。原発は廃炉になっても、核のゴミはなくならない。Wu Min-Yi の小説では、このことが間接的に言及されている。小説中では、島を一周する幹線道路を建設するという名目でつくられた道路が、実は核廃棄物を輸送することを目的としていたという設定になっているが、現実の蘭嶼島の核廃棄物貯蔵施設も缶詰工場を建設するのだと住民は思っていたという。[22] 小説の終盤近くで、Dahu は津波のあとの海岸で娘と遊んでいる Hafay が、今日はブーツではなくサンダルを履いているのに気づき、彼女の‘extra toes’ が左右の足に生えた新芽のように美しいと感じる (‘each extra toe was like an adorable millet spout’ 295)。この描写は、マーシャル諸島を舞台にした Robert Barclay の *Meḷaḷ: A Novel of the Pacific* (2002) に登場する左手に 6 本目の小指をもつ青年 Jebro を想起させる。ロンゲラップ環礁で被ばくした母親をもつ Jebro は「爪のないやわらかい余分の指」を魔法の指と呼び、水につけると魚をつれると自慢する。Wu がさりげなく描く Hafay の両足の余分の指も、おそらく核廃棄物の影響だろう。「新芽」に譬えられるその指は、負の遺産を負いながらも生きる人間のレジリアンスを感じさせる。この小説には、現代の環境問題のいくつかが提示されている。太平洋に浮かぶ巨大なゴミの集積、気候変動によって巨大化したサイクロンと津波、そして核廃棄物。この小説の最後は、原発事故後の廃炉の遠い道のりのまだ初歩に位置する日本とも無関係でない。

### ３．Alexis Wright の近未来ディストピア小説 *The Swan Book*——気候変動と放射能汚染

中国系アボリジナル作家 Alexis Wright の小説に描かれるアボリジナルのコミュニティもまた「無用化」「廃棄物化」された人々からなる「人間のごみだめ」である。[23] 下記の引用は *Carpentaria* (2006) の第 1 章冒頭におかれた大文字体の文章の後半部である。

> […] 鐘の音は、オリーブの枝をくわえた白い鳩 [24] が降り立つことのない遠くの村の無垢な幼い黒人の少女たちをも呼びよせる。日曜の礼拝から家に帰る少女たちはまわりを見渡し、

---

[22] 「台湾・先住民の島に放射性廃棄物 見過ごされた危機 台湾の孤島で」2012 年 11月24日放送 TBS 報道特集 (http://blog.livedoor.jp/kiiko_/archives/31140907.html).

[23] Kristiina Varrone, ‘Alexis Wright’s *Carpentaria* from an Ecocritical Perspective’, *International Journal of Arts & Sciences* 8.2, 2015: 69-74 は、アボリジナルのレジリアンスを廃棄物再生にみる点で Sei Kosugi, ‘Survival, Environment and Creativity in a Global Age: Alexis Wright’s *Carpentaria*, Lynda Ng ed, *Indigenous Transnationalism: Essays on Carpentaria*, Giramondo, June 2018 (forthcoming), pp. 135-158 と共通する。東日本大震災以降の日本の核問題を念頭に *Carpentaria* をエコロジー小説として読むこの拙論では、本稿でとりあげた Wu Ming-Yi の小説とも関連する *Carpentaria* のゴミの浮島について、鉱山開発による汚染を見つめる Will のまなざしに、Alexis Wright が編集したエッセイ集のなかのウラン鉱山を描写した‘Warlpiri visit Ranger’(*Take Power Like This Old Man Here: An anthology celebrating twenty years of land rights in Central Australia*. IAD Press, 1998)のまなざしを重ねて論じている。

[24] オリーブの枝を加えてノアの箱舟に戻ってきた鳩は、洪水の水が引き陸地があらわれつつあることを知らせる希望の象徴。

[放射性降下物さながら] 天から人間の屑が降るのを見て、落ち着き払った声で「この世の終わりが到来した」と告げる。[25] (1)（日本語訳は筆者、下線は筆者）

「不用物」かゴミのように行場のないアボリジナルたちが村にあふれている様子を終末的な光景として提示しているが、放射性降下物というゴミと社会で「無用化」される先住民が重ねられている。このディストピア的ヴィジョンは、*The Swan Book* (2013)で展開される。

*The Swan Book* は、21 世紀終わりの近未来を描いている。世界中で人々は砂嵐や洪水や津波、放射性降下物やブリザードから身を守り生き延びるのに必死で、政府は生まれたと思うとすぐに崩壊してしまう（8-9）。気候変動と地球温暖化による難民がオーストラリアに押し寄せ、難民たちはアボリジナルたちが居住する放射能で汚染された船の投棄された沼地の周辺の居留地域(detention camp)にゴミのように押し込められている。主人公のアボリジナルの少女をユーカリの木の洞のなかから救い出したジプシーの女性 Bella Donna も‘climate change wars’ (23) の難民である。前作 *Carpentaria* (2006)でも、Wright は白人たちが先住民の土地や川を自分たちの思い通りにコントロールしようとすることを皮肉に描いた。川はそんな白人たちを容赦なくはねつけ、創造神話の虹蛇はしっぽの一振りで川の流れを変えてしまう。*The Swan Book* は、アボリジナルのコミュニティにおける子供の性的虐待を理由に政府が北部準州に介入し、アボリジナルのコミュニティを軍の監視下においた 2007 年のハワード政権下の政策 (‘the Intervention’)を批判している。[26] この小説の近未来のオーストラリアでは、アボリジナルの先祖の土地はいつの間にか軍事訓練演習場(‘a secret locality for Defence Force scheduled training manoeuvres’ 12)とされ、沼に廃棄された船は戦闘機が爆弾を落とすターゲットとなる。大陸弾道ミサイル迎撃実験でミサイルが頭上を飛び交うなかで人々が生活するマーシャル諸島のミッドコリドー地帯を連想させる光景である。

このディストピア小説に描かれる近未来のオーストラリアの街は奇妙な退廃の様子を呈している。街にはストリート・チルドレンがあふれ、段ボール箱をかぶって通りで眠るホームレスたちの上に、空を渡る途中で疲弊して死んだ白鳥の群れが焼夷弾のように降ってくる。何千人もの人口が街から消え、門には植物がはびこる。主人公のアボリジナルの少女 Oblivia は、子供のころ、ガソリンを吸ったアボリジナルの少年たちにギャング・レイプされたトラウマで口をきけなくなって 10 年間ユーカリの木の洞のなかで胎児のように眠るが、ジプシーの Bella Donna によって、外の世界へ引っぱり出され、育てられる。「忘却」

[25] 下線部の原文は‘Little girls who come back home after church on Sunday, who look around themselves at the human fallout and announce matter-of-factly, Armageddon begins here’である。Philip Mead はこの光景を‘post-nuclear apocalypse’(190)と呼んでいる。(‘The Geopolitical Underground: Alexis Wright’s *Carpentaria*, Mining, and the Sacred’, *Cross/Cultures* 173, January 2014: 185-205.)

[26] Katherine Mulcrone, ‘Wright’s cygnet-ure achievement eludes conclusions: Alexis Wright, *The Swan Book* (review)’, *Antipodes* 28.2, December 2014: 518-9 の p.519、Adeline Johns-Putra, ‘The Rest is Silence: Postmodern and Postcolonial Possibilities in Climate Change Fiction’, *Studies in the Novel* 50.1, Spring 2018: 26-42 の p.34、Maria Kaaren Takolander, ‘Theorizing Irony and Trauma in Magical Realism: Junot Díaz’s *The Brief Wondrous Life of Oscar Wao* and Alexis Wrigt’s *The Swan Book*’, *Ariel* 47.3, 2016: 95-122 の p.115 参照。

という名の声なき少女 Oblivia は、ある日汚染された沼地に降り立った黒鳥 (a black swan) に見つめられ、その沼にすみついた黒鳥の群れと奇妙な絆をもつ。気候変動のために人間と同様、「難民」となった黒鳥たちは、政府が汚染された沼を埋めてしまうと、Oblivia を追って、オーストラリア南東部の街の公園にやってくる。オーストラリアで初のアボリジナルの大統領となった都会育ちの青年 Warren Finch と縁組して大統領夫人となった Oblivia は、生まれ育った北部の沼地と黒鳥たちから切り離され、南東部の都市の邸宅で監禁状態となり、Machine と呼ばれる人間かサイボーグかわからない（日本語を解するらしい）警護人に見張られる。ときどきテレビに自分とは思えない服装をした大統領の‘television wife’が夫の脇に無言で立つ姿を見て、Oblivia は自分のアイデンティティが盗まれたと感じる。初のアボリジナル大統領となった夫の Warren Finch はあっけなく暗殺され、国内はその死を悼む人々の怒りで暴動がおこり、不穏な雰囲気が高まる。

この小説には人間と動物と機械の区分がない。監禁状態のアパートに同居する（Oblivia の頭のなかに存在する）the Harbour Master の子分の猿 Monkey (Rigoletto)は人間の言葉をしゃべり、動物園の猿たちを開放して、自らも「独立」しようとする。一方、Machine は主人が暗殺されるとさめざめと涙を流す。気候変動難民の人間たちと黒鳥の群、国内の難民であるアボリジナルたち、生きている人間と死んだ人間の霊が混在している。ラクダの商人 (the camel man) の Half Life（半減期）という名は、サハラ砂漠のフランス核実験場周辺で生活していたベドウィンなどの遊牧民と、オーストラリアの砂漠での核実験やウラン鉱山開発で先祖の土地を失ったアボリジナルたちの存在が重なることを示唆している。[27]

前作の *Carpentaria* では、植民者の築いた町 Desperance と鉱山がサイクロンで一掃処分され、先祖の蛇の眠る大地の上に新しい家を築こうとする Norm の眺望は希望に満ちているのに対して *The Swan Book* のヴィジョンは暗い。しかし、最後は次のように締めくくられる。‘It is a bit too hot and dry here. *Jungku ngamba, burrangkunu-barri.* […] Maybe *Bujimala*, the Rainbow Serpent, will start bringing in those cyclones and funneling sand mountains into the place. Swans might come back’ (334). *Carpentaria* に登場する壮大な創造の虹蛇の光景はもはやここにはないが、この最後の文章は、砂漠化した不毛な土地に虹蛇がくだり、再び造形しなおすことに希望を託している。[28]

## ４．Amitav Ghosh のエコロジー小説とエッセイ——気候変動と核実験

インドのエコクリティシズムとしては、生物多様性を消滅させる近代農業の単一栽培とグローバリゼーションによる文化の単一化とを重ねて批判した *Earth Democracy* (2005)[29]の

[27] Half Life は‘What was the point of complaining about how life had become? If all that was left of your traditional lands were tailing dame and polluted pond life, and the place looking like a camel’s cemetery?’(315)と述べる。

[28] Adelle Sefton-Rowston, ‘Hope at the End of the World: Creation Stories and Apocalypse in Alexis Wright’s *Carpentaria* and *The Swan Book*’, *Antipodes* 30.2, December 2016: 355-68 も終末的ヴィジョンを描くこの小説の最後に‘hope, destruction and renewal’ (363)のテーマをよみとっている。

[29] Vandana Shiva, *Earth Democracy: Justice, Sustainability, and Peace*, Zed Books, 2005.

Vandana Shiva、インドのダム建設と核開発に共通する要素を指摘し批判する Arundhati Roy[30] と並んで、Amitav Ghosh の小説とエッセイが挙げられる。カルカッタ生まれで、アメリカに在住するベンガル系インド人作家 Amitav Ghosh の小説 *The Hungry Tide* (2004) は、バングラデシュとの国境にまたがるベンガル湾河口のマングローブの群生するデルタ地帯 'the Sundarbands' を描くポストコロニアル・エコロジー小説である。[31] 多数の小さな島を抱き流れるマングローブ地帯の川は、巨大な生き物のように常に形を変える。その描写には、Wright が描くカーペンタリア湾の潮の満ち干に合わせてゆっくり呼吸する川の描写に通底する要素がある。このマングローブのデルタ地帯は、分岐した川が合流し、陸と海の境界で海水と川の水が交じり合う、「流動性」「混交」といったポストコロニアル的テーマを象徴するトポスでもある。境界の曖昧さは、この'the tide country' に棲息する動物や、住む人々、宗教についてもいえる。生物学者 Piya が観察する'the Irrawaddy dolphin'には、海水と真水に棲む 2 種類があるが、Piya はそのどちらともつかない行動をとる固体に出合う。主要登場人物たちが住む Lusibari という架空の島は、19 世紀にスコットランド人 Sir Daniel Hamilton がカーストのない社会の創設を夢見て買い取った土地であり、漁師 Fokir が唱える土地の守護神 Bon Bibi への祈祷は、ヒンズー教とイスラム教の混交のようなものである。この小説では、1979 年の'the massacre at Morichjhãpi' [32]として知られるベンガル政府によるバングラデシュ難民 (Hindu Bengali refugees) の虐殺（その多くは不可触民 Dalits であった）と、人間による動物の虐殺（燃料油のためにのイルカ乱獲）が並列して語られる。ベンガルトラの保護のためにアメリカや世界諸国から寄せられた基金が、トラとマングローブの保護を口実に、不法居住者である難民の虐殺に利用されるのは皮肉である。人間同士と動物と自然の共生を考えることを提起するこの小説は「余計な(superfluous)者」として駆除の対象とされる難民を描く点において、Alexis Wright の近未来ディストピア小説と通底する。[33]

津波がマングローブを襲う場面を描くこの小説が 2014 年に出版された数ヶ月後、スマトラ沖地震の津波でインド東岸が大被害を受けた。Ghosh は *The Great Derangement: Climate Change and the Unthinkable* (2016) において、そのとき行った被害の調査にも触れ、地球温暖化の加速が the Sundarbans のような 'low-lying area'の存在を脅かしていると述べる。エッセイの冒頭で Ghosh は、自分の先祖はもともと Padma River の流域に住んでいたが、1850 年代半ばに突然川が流れを変えて村を呑み込み、住民たちは 'ecological refugees'となったこと

[30] ダム建設政策の非人道性を批判する'The Greater Common Good'とインドの核政策を批判する'The End of Imagination'の二つのエッセイ。Roy は「軍需工場のために核爆弾があるように国の＜発展＞のためには大型ダムがある。共に大量破壊兵器」であり「共に政府が自国民を支配するために使う兵器である」(90)と述べる(片岡夏実訳『わたしの愛したインド』築地書館、2000)。

[31] 本稿における *The Hungry Tide* 論は、小杉世「ポストコロニアル・エコロジー小説」(海外新潮)『英語青年』2005 年 10 月号に一部基づく。

[32] Nishi Pulugurtha, 'Refugees, Settlers, and Amitav Ghosh's *The Hungry Tide*', *Cross/Cultures* 121.15, January 2010: 81-89. p.83-4 参照。

[33] このような生政治が全体主義や戦時の非常事態などの例外状態においてのみならず、民主主義国家の日常においても起こりうることは、Giorgio Agamben が主張するところである。

に触れる。Ghosh によれば、気候変動の問題は「文化」や「想像力」の危機の問題である(‘the climate crisis is also a crisis of culture, and thus of the imagination’ 9)という。文化は欲望を生み、車や電化製品や芝生のある庭や住居といった ‘carbon economy’を支える現代の都市生活の文化への欲望を生むが、近代性 (modernity) そのものを見つめ直す必要に直面している。Ghosh は 1978 年にデリーを襲ったサイクロンに遭遇した経験に基づき、このエッセイで気候変動について論じ、都市圏内に原子力施設のあるデリーがサイクロンに襲われたらどうなるかを、専門家たちのインタビューも援用しながら、詳細に想像している。

Ghosh の作品の批評でほとんど触れられることがないが、Ghosh はインドの核実験が再開された 1998 年の直後にパキスタンに近接する核実験場の近くの町 Pokaran で被ばく者たちに 1974 年の実験以降の健康被害について取材し、政治家、軍事関係者などのインタビューにも基づいてエッセイ *Countdown* (1999)を上梓している。Ghosh は核兵器を‘the currency of global power’ (8)とみなす政治家や軍関係者たちの言説を分析し、自国の‘empowerment’ (10)を求めるその感情構造は、Mahatma Gandhi が解放運動で重視した‘sense of self-esteem’(10)の再建という問題とも無関係でないことを指摘する。Arundhati Roy は「より大きな公共の利益のために」(21) 行われるダム建設の立ち退き政策の非人道性を批判し、「インドのもっとも貧しい人々は、もっとも豊かな人々の生活様式を支えるために補助金を払っている」(18)とその植民地構造を指摘するが、これはダム建設のみならず、鉱山開発、原発、グローバル経済活動の結果としての気候変動にもあてはまる。

## ５．映画と小説にみるポストニューマン・エコロジー

James Cameron 監督の映画 *Avatar* (2009) は、DVD が 2010 年の Earth Day の 14 周年に発売され、「地球を守る戦士になろう(“stand up and be warriors for the Earth”)」というキャッチフレーズで、購入者に 100 万本の木を地球上に植える ‘reforestation project’ への参与を呼びかけるなど、さまざまなエコロジー運動に利用されたことを Cynthia Erb は指摘している。[34] また、Dominic Alessio と Kristen Meredith は、この映画がアメリカのイラク攻撃という社会政治的文脈において、アメリカ軍の「暴力」とブッシュ政権の「アメリカ帝国主義」に対する批判という要素をもつ一方で、先住民ナヴィ(Na’vi) の‘noble savage’としての描き方が‘a colonialist mindset’を露呈した‘‘Lost Eden' utopian fantasy’になっているという点に関して、‘Avatar presents a wide array of Orientalist stereotypes’[35] と指摘している。実際、一世紀以上未来の設定のはずだが、この映画の惑星パンドラの先住民ナヴィたちは、ネコ科の動物のような鼻頭と目、動物のように動く立った耳、長いしっぽをもち、人間の 1.5 倍くらいの身長の生物で、先祖返り的なアニミズムの世界に生きているものとして提示されている。

映画の設定は、22 世紀半ばの地球と惑星パンドラ、地球は資源も枯渇し、環境が著しく

[34] Cynthia Erb, ‘A Spiritual Blockbuster: Avatar, Environmentalism, and the New Religions’, *Journal of Film and Video*, 66.3, Fall 2014: 3-17.
[35] Dominic Alessio & Kristen Meredith, ‘Decolonising James Cameron’s Pandora: Imperial history and Science Fiction’, *Journal of Colonialism & Colonial History*, 13. 2, Fall 2012.

悪化しており、生き残りのために人間は宇宙へ進出している。惑星パンドラの大気の構成は地球と異なり、人間は有害物質を取り除く特殊なマスクなしに呼吸ができない。そんな惑星パンドラを人間が侵略する理由は地下に眠る貴重なエネルギー資源を得るためである。先住民の土地の鉱山資源を西洋人が搾取するという、オーストラリアのウラン鉱山はじめ、世界のいたるところで起こっている開発がテーマとなっている。ナヴィと呼ばれる先住民と交渉するため、ナヴィと人間の DNA をかけ合わせて高額な資金を費やして開発したアバターを、カプセルに横たわった人間が電脳操作で動かすアバター・プログラムが推進され、ナヴィに人間の言葉と文化を教える植民地教育も試みられており、ナヴィの部族の一部は人間の言葉を解するが、彼らは地球の人間が提供する見返りには関心を示さず、鉱山資源開発に協力しようとしない。科学者であった一卵性双生児の兄と同じ DNA をもつ元海兵隊員のジェイクは、兄の死後、兄にかわってアバターを操作するよう、研究班に依頼される。戦傷で下半身不随となったジェイクは、アバターの仮想身体を通して、地球より重力の小さな惑星で再び身体の自由を経験する。ジェイクはナヴィと交渉するためにパンドラに送られるが、ナヴィの部族オマティカヤの長の娘で女戦士のネイティリ(Neytiri) から戦士となる訓練を受け、ナヴィの言葉と習慣を学ぶうちにパンドラの生態系とナヴィの生の哲学にひかれていく。やがて武力行使に出た人間たちと対抗し、ジェイクはナヴィの伝説のトゥルーク（巨大な翼竜）をてなづけ、トゥルーク・マクト（翼竜乗り）となって、ナヴィの側に立って闘い、最後には生命の樹の介入で、魂をアバターの身体に移植され、ナヴィとして再生するという物語になっている。この先住民ナヴィの描写には、Alessio らが指摘するように、マオリその他の先住民のさまざまなイメージが使用されている。ナヴィの戦士は大人になると、マオリの伝説の「鯨乗り」ならず、「翼竜乗り」となるのであり、「戦士」の伝統を重んじ、ホンギ（マオリの額と鼻をすり合わせる挨拶）を行い、モコ（マオリの刺青）に似た模様のある青い肌をもつ。しかし、パンドラの惑星の生態系の中心にあるナヴィのアニミズム信仰の対象となっている生命の樹は、死んだ生命が土にかえり、さらに転生するという単なるアミニズムではなく、後頭部のフィーラーという触覚のようなもので物理的にアクセスしてナヴィたちが樹や動物と一体となり、惑星全体をつなぐ電子信号の交換による巨大な生命のネットワークとなって生態系を保持しているという疑似科学的な説明がなされており、地球人から「原始的な生活を営んでいる」とみなされる先住民ナヴィが極めて進化したオールタナティブな生態系のシステムをもつことが示唆され、ポストヒューマンのオールタナティブな生存の可能性が提示されている。しかし、同時に、疑似科学的な説明を与えることで、アニミズム的なものをグローバル世界の網目のなかに還元してしまってもいる。映画はジェイクの転生と地球軍の撤退によってハッピーエンドに終わるが、次に惑星パンドラで起こりうることは、この新しいエコシステムを自分たちの利になるように改変しようとする地球の科学者の進出と、高額のお金を投じて自分の DNA からアバターの製造を科学者に注文し、臓器移植ならず、魂の移植によってポストヒューマンの生を得ようとする資本家たちの進出なのかもしれない。

太平洋は昔からさまざまな架空の物語の舞台となってきたが、人間のいない（消滅したあとの）という、もうひとつの意味でのポストヒューマンの生態系の空想は、Yann Martel の小説 *Life of Pi* (2001)[36] にもみられる。インドからカナダへ向かう船が難破し、主人公パイが漂流してたどり着いた甘美な味のする海藻からなる浮島のエコシステムは、海水魚を海藻の水中下の根っこの迷路に誘い込み、海藻から出る真水で迷路を満たして魚を殺したあと、夜になると酸性の溶液を排出して魚を溶かし吸収する。水面下の根っこだけでなく、島の地上にある木も同じくゆるやかな食肉性であり、死んだ動物や人間を葉っぱで覆い、ゆっくりと吸収していく。パイが発見した葉っぱにくるまれた 32 本の人間の歯の表面は無数の小さな穴だらけで、歯のカルシウムもやがてはゆっくり溶かされ吸収されることを物語っている。どこでもない茫漠とした太平洋の真ん中に浮かぶミーアキャットの大群と海藻だけからなるゴミや排泄物や土や下生えの全くないこのきわめてクリーンな生態系は、人間なるものが地上から消滅したあとも存続するであろうエコシステムの不気味さを呈している。魚と同様に、人間の死骸をも栄養物として吸収する食肉植物に、主人公のパイは身震いをおぼえ、半ば安住しようかと思っていたこの浮島を離れる決心をする。元来、地中に埋められた人間の死骸はバクテリアや微生物の働きで腐食・分解し、土に含まれる有機物となって、植物に吸収されていくのであるから、見方を変えれば、この浮島の生態系を支える食肉植物は単にその行程を短縮しただけに過ぎないが、人間が動物や植物を食する食物連鎖の頂点にあるという幻想を打ち砕く故に不気味なものとして知覚される。

## ６．おわりに

台湾の Wu Ming-Yi の小説とオーストラリアの Alexis Wright の小説に共通してみられる廃棄物、気候変動といったモチーフの関係性と、Alexis Wright とインドの Amitav Ghosh の小説に描かれる河口地帯の描写に通底する自然観、Ghosh の地球温暖化や核をめぐるエッセイに共有される現代のグローバルな環境問題の意識について論じた。人間の自然への影響力に関しての優越的視点ではなく、これらの作品には、むしろその制御不可能性と人間の「欲望」のあり方自体を見直す視点が見られる。Gayatri Spivak は「美的教育 (aesthetic education)」を「想像力の訓練」による「欲望の再配置 (‘a rearrangement of desires’)」[37]と呼んだが、人新世の芸術に求められるのは、まさに我々の欲望のあり方を問い直すことだろう。しかし本当に人間は、虫やバクテリアや鉱物の眼で地球を眺めることができるだろうか。必要となるのは、Spivak が述べるような他者性を内包した惑星について思考する想像力なのだろう。[38] 本稿はほんの見取り図にすぎない。今後、エコクリティシズムの理論的枠組をより詳しく検討するとともに、それぞれの作品について、掘り下げて考察していきたい。

---

[36] Yann Martel, *Life of Pi*, Mariner Books, 2003.
[37] Gayatri C. Spivak, *An Aesthetic Education in the Era of Globalization*, Harvard UP, 2012, p.125.
[38] Diana Brydon, ‘Experimental Writing and Reading across Borders in Decolonizing Contexts’, *Ariel* 47.1-2, 2016: 27-58 も Spivak の‘planetarity’の他者性について触れている。p.34 参照。